

# 制作経験が作品の評価や作業に及ぼす影響

1932012 井上瑛美子

指導教員：山崎治 准教授

## 1.はじめに

松本ら(2017)は、創作折り紙の作品に対する感性評価に着目し、実際に制作する経験の有無やその経験の内容によって、鑑賞を通じた作品の評価が影響を受けるかを検討した。その結果、制作の経験によって鑑賞作品に対するポジティブな印象が生じやすいこと、鑑賞作品の創作プロセスを高く評価することが明らかになった。このことから、使い手側における「鑑賞」を通じた感性価値の評価に対して、使い手が「作り手を体験したこと(制作したこと)」が影響していることがわかる。

本研究では、松本ら(2017)と同じことが折り紙以外の制作物で実現可能かを調べる。このような研究を通じて、「作り手を体験すること(制作経験)」が感性価値の発見に良い影響を及ぼすのなら、様々な商品や体験に対して活用できると考えられる。

## 2.目的

本実験では、粘土を使った作品の鑑賞と制作に着目し、制作の経験が作品の鑑賞による感性評価に影響を及ぼすかを検討する。

## 3.実験 粘土作品の鑑賞・評価実験

本実験では、各参加者を事前に制作群と手作業群に割りあて、各作業前後にアンケートに回答してもらった。

### 3.1 方法

**実験参加者：** 本学情報科学部情報ネットワーク学科3, 4年生10名が実験に参加した。

**実験計画：** 制作経験の要因による1要因2水準の参加者間計画で実験を行った。

**材料：** 銀島産業株式会社製「お米のねんど12色」を使用し、計4つの鑑賞用粘土作品を制作し、フリー画像素材サイト「写真AC」(<https://www.photo-ac.com/>)でフリー画像の粘土作品の画像を2つ入手した。そしてそれぞれに3段階のグレード分けを行った。また、Googleフォームを用いて5段階評価かつ7項目のアンケートを作成した。事前アンケートには各グレード1枚ずつ、事後アンケートにはさらに1枚ずつを加えた計6枚の粘土作品に対する評価をする。項目は①かわいさ、②発想力、③身体的技術、④独創性、⑤好ましさ、⑥作品への興味関心、⑦作成してみたいか、⑧粘土への興味関心となっている。

**手続き：** 実験は個別の作業として行ったが、同じ群に割り当てられた参加者を2,3人のグループとして実施した。実験の全体説明後、事前アンケートに回答してもらい、各作業後に両群に事後アンケートに回答してもらった。「粘土制作群」は粘土を用いて

30分の自由制作を行ってもらい、その際に来るだけ高いグレードの作品を作るよう指示した。「手作業群」は手を使う作業として、ハンドスピナーや立体パズルの組み立て等を15分行ってもらった。

### 3.2 結果

制作経験を参加者間、事前事後の評価を参加者内に配置した2要因分散分析を行った結果、有意差がでたのは「だんご(グレード1)」の①かわいさと④独創性、⑤好ましさとなった。ここでは①かわいさと④独創性について述べる(図1参照)。

①では、制作経験の要因の主効果が有意であり( $F(1,8)=10.286, p=0.012, \eta^2=0.562, 1-\beta=0.999$ )、事前事後の主効果が有意ではなく( $F(1,8)=0.4, p=0.544, \eta^2=0.048, 1-\beta=0.266$ )、交互作用が有意でなかった( $F(1,8)=1.6, p=0.241, \eta^2=0.167, 1-\beta=0.755$ )。

④では制作経験の要因の主効果が有意傾向であり( $F(1,8)=3.571, p=0.095, \eta^2=0.309, 1-\beta=0.998$ )、事前事後の主効果が有意であり( $F(1,8)=9.143, p=0.016, \eta^2=0.533, 1-\beta=0.999$ )、交互作用が有意でなかった( $F(1,8)=0, p=1, \eta^2=0, 1-\beta=0.05$ )。

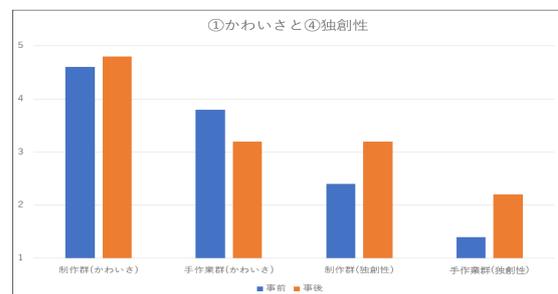


図1: かわいさと独創性の群別前後比較

## 4.まとめ

本実験の結果では、想定していた制作の経験が作品の鑑賞による感性評価に影響を及ぼすことは確認できなかった。計6枚の粘土作品のうちグレードが低い1作品にのみ、制作経験の効果が確認された。松本らの先行研究とは異なり、かわいさや独創性といったものに有意差が出ている。また、グレードが最も低い作品の項目に有意差が出たことから、制作過程のわかりやすさや工夫点が見られることでポジティブな印象を抱くと考えられる。よって、扱うものの違い、回答の偏り、参加者の増加を行えばまた違う結果を得られるかもしれない。

## 参考文献

松本一樹,ルトコフスキトマシュ&岡田猛. (2017). 創作経験は鑑賞過程をどのように変容させるか-心理・生理指数の複合的アプローチによる検討-. 日本認知科学会第34回大会.